

正規の生徒以外の者で所選の実技を学修しようとする者を別科生として出席させる制度。従来は聴講生（所選の学科のみを聴講する。）制度のみ置かれていた。

三、「修身」科目設置

「修身」の科目は従来は図画師範科のみに課せられていたが、今回の改正により全科に課せられることとなった。

四、従来の「撰科」が「選科」と改められた。

五、その他

学費改正（値上げ）等については同じく639頁「東京美術学校近事」参照。

⑭ 学生生活

学生時代を語る 故松田権六氏

〔松田権六氏は大正八年本校漆工科卒業である。他界される三年前の昭和五十八年七月八日、お宅で本校在学中およびその前後のことを話して頂いた。本稿はそのときの録音をまとめたものである。氏はその著『うるしの話』（岩波新書、昭和三十九年）にも「私の修業時代」として本校在学中のことを記しておられるので参照されたい。〕

入学前

私は農家の六人兄弟の末っ子でした。長男が後を継ぎ、次男の兄は仏壇師になりました。生まれたのは、今は金沢市内に編入されていますが、当時は大乗（桑）村といったところで、仏教の盛んな土地柄でした。兄は徒弟的な仕事から一人前になって、家でよく仏壇

を作っていました、忙しいときなど、ちょっと手伝ってくれというので、私は七才のときからよく手伝っていました。そんな状態だったときに、当時暁鳥あけがらすという金沢出身の偉い坊さんがいて、父がこの人に私の将来について相談したところ、私の方は門戸を広く学問的にやるようにして兄と一緒に仏壇作りをやったらよい。それには石川県工業学校の漆工科に入るのがよい、ということになり、入学しました。受持の先生は東京美術学校漆工科卒業生の藤岡「金吾」さん、吉田「秀男」さん、前川「佐一」で、授業は正直なところ、七才から実地にやっていた私からみれば低級のものでした。卒業のとき、もっと上級のところをと思い、上野の美術学校へ行くことに決めました。三人の先生方はその大先輩にあたる第一回卒業生の六角紫水先生に紹介状を書いてくれ、それで初めて東京へ出て来たわけです。また、あの先生呑兵衛だからといわれ、地元のおいしい酒を一本持って行ったところ、そのまま十数人居る書生と一緒に先生の自宅に泊まることになって、そこから試験を受けに学校へも通いました。

入学試験

当時の美術学校の入学試験はいわゆる石膏デッサンのときもあればそうでないときもあり、前もって勉強しておいてもうまくいかない。デッサンは工業学校ではやっていなかったが、入試前にはみっちりやりました。私のときはまず写生が話題され、畑から持って来たばかりのような生きのいい大根、人参、その他の野菜などを大きなケント紙に描き、日本画風に彩色しました。これが一日目で、次の日はそれをもとに図案を描く。あと面接、題に基づいた簡単な作

文、投影画法、歴史、語学（英語か仏語）などがあり、四日間くらい続けてやりました。

予備科

入学すると先ず予備科に入ります。これは四、六月の三ヶ月間、つまり夏休み前をもって終るわけですが、いわゆる長期試験のようなもので、わずか四、五日の試験で美術に向くか否かを決め、一生を決めるのでは見損なう場合もあるため、この長期間にいろいろなことをやらせて本科に編入してもよいかどうかを決めるわけです。

漆工科

本科に進んでから本当の美術家としての勉強が始まりました。漆工科でありながら、日本画のあの先生について習いたいといえれば認められ、その先生は日本画の生徒と一緒にして教えるのです。油絵、彫刻も同様でした。私は日本画は寺崎広業、川合玉堂、小堀鞆音の三先生に習い、油絵は藤島武二先生のところに行きたかったのですが、人数が多すぎてだめで、岡田三郎助先生に習いました。その代り油絵は岡田先生一人に卒業するまで就いていました。彫刻は高村光雲先生。そこも人数が多かったもので、昼だけでなく夜も通いました。寺崎先生の家にも一年生の頃、一か月ほど書生で居り、大村西崖先生の所にも三か月居ました。六角先生の所にも居ましたから、私はいろんな所を書生として渡り歩いていたわけです。本科のほかに当時は選科があり、これは本科のような面倒な試験もなく、入ってしまえば本科と一緒に授業が受けられ、実技に必要な学科、例えば解剖学、色彩学、遠近法なども志望すればすぐ許可があり、聴きたい授業だけ聴ける。入学し易く、志望者も少ないというので

流行りました。ただ、就職のときには本科と比べて分が悪かったですけれど。

漆工科には蒔絵教室、彫漆教室、螺鈿、変り塗り（鞘塗り）などがありました。あの当時は彫刻科に牙彫の教室などもあり、私は石川光明先生に習いました。じきになくなりましたが。蒔絵をやりたい人は朝から晩まで蒔絵をやる風にもできました。蒔絵、彫漆のどちらを専門にするにしても、知識としてもう一方を稽古させるといふ具合で、人数が少ないので融通がききました。生徒は美術学校に入って初めて漆をやるという人の方が断然多かったですよ。

蒔絵の教程は手板に従ってまず線蒔の簡単な描法、それが出来るようになるのと金粉を蒔いて最後まで仕上げ、次がへら蒔。だんだん面倒な高蒔をやらせるといった具合です。ところが先生が亡くなるとその講座が終りになってしまったのです。石川光明先生が亡くなったときもそうでした。螺鈿の片岡さんも死んだ後、後継ぎがいない。片岡さんにも自宅へ行ってよくお世話になりました。変り塗りの橋本市蔵先生が亡くなった後も変り塗りがなくなりました。漆工の教程はある先生が生きていらっしやる間はそれに準じたものがありました。亡くなればどうしようもない。お弟子さんだとレベルが格段に違いますから。ああいう技術の性質上やむを得ないでしょうがね。「当時の授業要旨中の「勉強しながら作品の価格を見積る」という項について」授業ではそういうことはやりませんでした。

石川県は加賀の前田家の政策の結果、工芸国といわれるようにな

りました。前田家は漆では五十嵐派の一番の先生を連れてきて弟子をつけさせたりしていました。私が自分のやっているのが五十嵐派だと知ったのは上京後の大正三年です。というのは、六角先生の紹介で川之辺一朝先生の献上品の仕事を見学に行ったとき、すずめられて手伝うことになり、やってみると金沢のやり方と随分違う。すると、うちの方は光阿弥派のやり方で、金沢の方は五十嵐派でしょうといわれ、自分のと違う流派があることを知りました。その仕事が終わると川之辺さんの紹介で船橋さんの献上品の仕事を手伝うことになりましたが、船橋さんのところは船橋派という流派でした。大正年間にはまだかろうじて有名な流派が残っていて、そこに献上品の仕事が終わってくる。私はそういう所に行って只で、というより食費として五円ずつ出し夜具持参で、朝晩、日曜もなく帰省もせずに通きました。献上品の製作には流派の特徴がまる出しになる。私は小堀鞆音先生に就いていましたから、どの家柄に献上品の仕事が行くかは、先生のところに図が行くからよくわかる。石井士口先生の紹介で渡辺香涯先生のところへ絵を習いに行きましたが、そこにもいろいろな献上品の図の注文が来ていました。私が絵を習っている側で先生は献上品の図を描いていらっしやる。こういう風に出来上ってゆくのか、というのがわかるのです。そして紹介状を書いて貰ってはあちこちの献上品の仕事を手伝いました。流派というものが終りになったのは官展のためでしょう。私の場合は学校よりもこうしていろいろな流派の仕事を手伝うことの方が勉強になったと思います。卒業製作には材料費が支給され、科によって額が決まっています。

いました。蒔絵はいちばんお金がかかるのです。金粉一匁五円でした。お金が少なければ少ないものを作ろうと思っていたところ、卒製の時期になると皆が私に手伝えといい、何人かの手伝って金粉をまわして貰い、自分の作品を作りました。作品が出来上がる前に金粉代として学校からお金を支給され、作品は政府のものになるのです。昭和六年頃、ヨーロッパ旅行の途次、大使館で東京美術学校の参考品の判の捺してある卒業制作品を見て、十何点か修理したことがある。政府のものだからというので大使館の内部を飾るために持ち出したのでしょうか。

私が漆工科に入学したときは志願者が多く、毎年これ程志望者が来るとは限らないからというので沢山採用した。そうしたら学生時代に亡くなったのが四人もいました。先生には白山松哉、石井士口、野口吉五郎、沢口悟一〔沢口の講師採用発令は大正十三年三月〕、橋本市蔵といった方々がおられ、六角先生は私が卒業する年に辻村先生と一緒に入られました〔正式には六角は大正五年十月、辻村は同六年五月採用〕。白山先生は大変緻密な蒔絵を上手にする人でした。それから、私共が先生に「光琳ってどういう人ですか。」などと聞くと、「そうねえ、おいらにそういう事聞かれると……。うん、何と言ったらいいか、あれは人間が偉かったんでね。仕事はだめなんです。しかし、人間が偉いと世の中ってものはその作ったものまで偉いと思うものだ。世間というのは変なものですよ。」といわれる。そこで「人間はどう偉かったんですか。」と聞くと、「まあ、おいら詳しい話をすればきりが無いが、兎に角人物は偉かったん

だ。」といつもいっしょにしゃる。光琳の仕事は自分が見ても偉くないけれど、有名なのは人間が偉いから、まあ偉いんだろうと、そういう風に話をなさる人でした。先生はもともと四条派でもなければ五十嵐派でもない。有名な家柄のどれにも入っていないけれど、細い事をやらせると天下一品。実に達者で、細部がまた上手で、ちょっと他の人には真似られない。高く盛り上げることも、あの人は特別なやり方で、葉でも花でも輪郭の方を高くして真中をすくう、レリーフ彫刻的なやり方をする人で、そういうことは実に巧い人です。皆の真似られない驚くべき緻密な細工に優れた人でした。でもやはり川之辺先生とは違う。川之辺先生は本格の立派な大和絵系統の先生で、あれは本物です。白山さんの場合はあまり図柄など品良くないが緻密な仕事でかなう者はないくらいで、江戸時代ですらあれだけの人はいなかったでしょう。ご自身でも江戸時代には本物の仕事のできた人はまだいなかったと我々の前で公然といていました。しかも二三日で他の人の考えられそうもないものを作っていました。しかも二三日で他の人の考えられそうもないものを作っていました。うくらい手も早い人で、それについては有名な話が沢山あります。明治年間に白山さんの細い仕事が高く評価された時代があった。熱海に美術館〔現在のMOA美術館〕を作った救世教の初代様〔岡田茂吉〕は初め蒔絵の仕事をやっていた漆の職人だったらしいが、白山先生の礼賛者で、少しお金が自由に手に入るようになった時は白山さんの作品を次々と買われて、今、あそこには白山さんの作品が一番沢山収蔵されている。川之辺さんには実際には会っていないが、御子息の一湖さんはたまには講師として来られたようです。私

が献上品製作を見学に行ったときは、一湖さんはもうご老体で、その子の一明先生がまだ五十幾つという年令で、殆ど采配を振るっておられました。その子供さんがまだ生きていらっしゃるらしい。

石井先生は第三回か四回の卒業生で、軍人になって、その子供さんたちがまた漆をやっていて秀才ぞろいです。先生は白山さんとは反対に、彫漆も蒔絵もやらず、一種独特の石井土口式でおやりになる。私が丁度本科に入った頃、なぜか石井先生が六角先生に松田を暫くよこしてくれんかといわれ、お手伝いに行ったことがありません。そのとき先生は乾漆の花瓶を作っていて、私は半年ばかり専ら粘土で雌型を作る手伝いをさせられました。そのうち川之辺先生から献上品の仕事を紹介されたので、昼間は献上品、夕方から花瓶作りという風になっていましたが、石井先生から気の毒だからもういいといわれました。先生は塗り専門で、独自の乾漆を作って、それに独特の色漆を作って、彫刻をしながらやるという、石井式彫漆とでもいべきやり方でなさいました。

六角先生は私が小さい頃から漆をやっているのを知っているから重宝だったんでしょう。私もいろいろなことを教えて頂くから、お役に立たなくてはと思っていました。私が献上品の仕事とぎれて先生の所に戻ってきて、いやな顔もなさらず泊めて下さる。大正三年の夏に、これはもう戦災で焼けてしまいました。宮内省の旧御殿の漆のお手入れを六角先生が大勢の人を指図しながらなさった。それは当時の建築装飾の代表的なもので、普段めったに見られないものですが、六角先生のおかげで、学校に入りたての私もお手伝い

しながら研究することができました。私が後に大きな建築物でも平気で仕事ができるようになったのはそのおかげです。国会議事堂の御便殿の仕事は美術学校に頼まれたのですが〔昭和五年。助教の時〕、当時美校では六角先生が一番上で、先生は私に「どうだ、君ひとつやってみないか。」といわれ、実際にやらせて頂きました。そんな風に、いい仕事でも一流に頼むほどの予算が無いときには、正木さんなどもよく私に仕事をまわして下さいました。

六角先生のお宅にアメリカのワーナー〔ラングドン・ウォーナー〕御夫妻が二か月滞在されたとき、私は先生のお申しつけで彼らの身の回りのお世話をしました。あるときワーナーさんが私に岡倉天心に教えを受けたことがあるかと聞くので、そんな方は聞いたこともありませんという、氏は、あの方は私が知っている日本人の中で美術、芸術教育に最も優れた方だ。一刻も早く習いなさい、といわれ、お出かけになった。あとで六角先生にそのことをいうと、岡倉さんは私の先生だが現在健康がすぐれず静養中なので、良かったら紹介しようと言って下さった。ところがついにその機会がなく、天心先生は他界されてしまいました。そのことがもとで六角先生は晩に通いの書生も含めて二十人ばかりを書生部屋に集め、半年以上も続けて天心がいかに優れた人物であったかを話されました。それが終わった後も私は横山大観、下村観山、本多天城、木村武山の各先生方や美術院の方々を訪ね、天心はどういう人であったかというのを聞き歩きました。そういった方々は皆溝口楨次郎さんの所へ聞きに行けという。溝口先生も参考図書を三十冊もくださった

り、可愛がって下さいました。それがもとで特別なご指導を頂き、美術学校では聴けなかったような貴重な勉強もすることができました。

卒業制作は学校全体で採点しました。それは私の卒業のときから実施されたもので、各科ごとにまちまちの点をつけるのは社会に卒業生を紹介する仕方として適当でないという判断によるものです。私は百点満点をつけられたのですが、当時は文展などでも敢えて一等賞を与えず二等賞を最高点とするのが慣例でしたから、変だと思いい、正木先生に取り消しを願いました。すると正木先生は庶務課長を呼んでそのことを話しました。ところが庶務課長は教授会で決めたことを、いかに校長の権限で修正してもあとで皆さんに判ることであるし、すでに文部大臣にも報告したから、一部修正するなどみっともないという。正木さんも、そういうわけだからしょうがない、我慢して貰おうというので泣き寝入りでした。その後私は郷里で兵役につき、一年半で除隊して正木さんのところへ挨拶に行ったところ、手渡されたのがフランスの美術博覧会の随分立派な賞状でした。「君に相談もしないで出してしまったが、意外にも賞状と金杯と金一封を頂いた」と。それを貰ってすぐ図書館へ駆けつけ、二年ぶりで卒業制作に直面しましたが、船で赤道直下を行ったり来たりしたにも拘らず作ったときのままだったのを見て、賞状を貰ったときよりも嬉しかったです。

卒業後の話になりますが、当時は美術学校を出たなんていうと、どうせろくな者じゃない、技術なんてなっちゃいないと見られた時

代でした。私も現に黒江屋とか大きな漆器の専門店へ順番に行つて使つて貰えないか聞いたところ、美術学校出だといふので断られました。何か作つたものを持って行つて見せればよかつたのでしようが、見せるものも無い訳ですから。また、白山さんの弟子だなどというところ、うちはそんな上物でなくていいんだと敬遠される。ですから、展覧会で賞をとるまでは皆困つていました。私の場合は小堀先生や渡辺香涯さんなど、献上品の仕事が次々と来る人の弟子でしたから、よく図を頼られました。香涯先生に頼めば高いが、私の所に来れば一日の日当を貰えばいい。手箱なら一枚描いて五十銭貰えれば上等なんです。当時弁当持参で朝八時から一日働いて日当が二十二銭でしたから、五十銭で手箱の図なら家に座つていてできるし、楽なものです。ところが、あいつは安い図を描くといわれるようになって、それで大村西崖先生と呼ばれ、以後図案は一切描きませんという誓書を書かされました。

大村先生について言えば、大正五年に美術学校に騒動がありました。生徒監になられた大村先生が長髪が大嫌い、それを全部切れと言つて強制的に切らせた。切らないなら学校に床屋を呼んで切らせるとまで言つたので、それが大分問題になった。長いだけならまだいいが、モシヤモシヤにして手入れもしない。あれはちょっとよくないですよ。

誓書を書かされた丁度その頃、私は根津の魚屋の二階を借りて、店の手伝いをしながら図を描いていました。家が傾いていたので、香涯さんが斜窓庵と命名しました。その家から根津権現前の家に引

越すとき、一緒に卒業した日本画や油絵の連中が頼みもしないのにリヤカーを引いて手伝いにやつて来て、いつの間にか押入れの中にあつた私の未完成の手箱に八百円の値をつけて農商務省工芸展覧会に出品してしまつた。それが最高賞の二等賞になり、政府買上げとなりました。すると連中は私の判子をどこかで買つて行つて八百円貰つて来て、半分は皆の飲み代にし、半分は次の飲み代を稼ぐ元金として私に預けるといった具合で、当時はそういう滑稽な仲間たちがいました。